バンパイアの恋人

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バンパイアの恋人

【Ｎコード】
Ｎ８４３０Ｓ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
志乃（しの）の彼氏・幸（みゆき）は、ストライクど真ん中の超美形。でもそれだけじゃない、実は幸はバンパイアだった！　「愛してる」とは言ってくれる幸だけれど、『実は自分の体（血？）目当てなんじゃないか』と日頃からフクザツな心境の志乃。そんなある日のこと、幸から「血液目当てのどこが悪い？」と言われた志乃はとうとうブチ切れて……コメディタッチなラブストーリーです。

「私、帰らせていただきます！」
「どうして？」
その質問に返事をせず立ち上がった私、前橋志乃（まえはし しの）は、目の前でおっとりと首を傾げている男をにらみつけた。人間離れした綺麗な顔立ちが、今夜は一段と憎たらしくみえる……そう、この美貌にだまされてはいけない。
――この男は吸血鬼、なのだ。
吸血鬼で、ついでに言わせてもらうなら私の彼氏。なんで吸血鬼と分かってて付き合っているの、って聞かれても、うまく説明できる自信がない。
さらに言うなら、顔目当て？って勘ぐられても言いかえせやしない。そのくらい、実際この男――福永幸（ふくなが みゆき）の顔は、あらがい難いぐらい私のストライクゾーンだ。いや、おそらく大抵の女の人の守備範囲に入るとは思うけど。
でも問題はその性格だ。その思考だ。そして嗜好だ。
彼は私のことを「愛してる」と言うが、正確には「私の血液を愛してる」のだ。そんな確信めいた気持にしょっちゅうさせられる。
――ええい、いっそのこと別れてしまえ！
って、毎度思うんだけど……

「志乃ちゃん、また幸兄さんとケンカしたんだって？」
「喧嘩中よ、まだ」

週末の土曜日、幸の妹のたからちゃんが遊びにきた。

たからちゃんは１ＬＤＫのアパートをきょろきょろと見回しながら「いいなぁ、一人暮らし」とうらやましそうにつぶやく。一見フツーに見えるこの子は、実は白衣の看護婦やってる吸血鬼でもある。そして私になついている……私って、吸血鬼に好かれる体質なのかしら？

「顔色悪いね。また献血してきたの？」
「うん、一昨日ね。赤十字センターから緊急メール入ったから」

私の血液型は全国でも２０００人に一人と言われるＲＨマイナスのＡＢ型である。ちょっと珍しい型だから赤十字に登録してあり、お呼びとあらばすぐに採血へとかけつけるのだ。
誰かが輸血を必要としている限り、助けに行くのは当然、むしろお互い様。いつか私も何かの時にはお世話になる可能性大なんだし。

だからこの血液は、断じて……そう、断じてアイツの為にあるわけではない！

「私の血って、そんなに美味しいのかなぁ……」
「幸兄さん、大好物って言ってたよ。もう他の味じゃ満足できない

んだって」
「他の味って、そんなに違うの？」
たからちゃんは「うーん、どう例えればいいかな」と持参したケーキのクリームをフォークですくい取った。
「食べ物で言うとね、O型はご飯みたいなものかな。B型はおかず系でー、あとA型は甘いデザートみたいな感じ」
「……」
分かるような、分からないような……
「ちなみにAB型は珍味系かな」
「ち、珍味！？」
「特にRHマイナスなら珍しいから、すっごい高級珍味な感じかも。からすみ、とか」
からすみ！？　私の血液が、からすみっ！？
「……からすみなんて、いやだ……」
「私もからすみは苦手。あ、別に志乃ちゃんの血液の事じゃないよ。ホンモノの食べ物のからすみって意味だから」
「……別にそんなこと、気を使わなくても傷つかないから」
むしろ吸血鬼ならば嫌って欲しいくらい。
「私はね、どうせ定期的に飲まなきゃならないなら、ご飯系かデザート系がいいと思うけど……幸兄さんの味覚って、私と全然違うみたい」
「……そうみたい、だね」

「やっぱり愛の力かなぁ？」
「それは、ナイ」
きっぱり否定させてもらおう。
アイツは私の血液が目当てなんだ。それ以外付き合ってる意味が分からない。

そんなことがあって後日、幸の自宅で改めて話し合いの場が設けられた。
「どうせ私の血液が目当てなんでしょ？」
「そんなことないけど……大体、血液目当てのどこが悪い？」
「どこが悪い、ってねえ！」
幸はにくたらしいくらい、いつものさらっとした表情で、これまたさらっと何でもないことのようにのたまう。
「外見目当てと言われるより、中身が目当ての方がいいと思わないか」
「そーゆー場合の中身って、心とか性格とか意味するんじゃないの！？」
「じゃあ君は優しい性格だからって人を好きになるのか？　親切な心の持ち主なら誰とでも付き合えるのか？」
「うっ……そうゆう事じゃなくって！　ならいいよ、体が目当てって言いかえてあげる」
「体目当て？　人間の肉体なんて二十年も経ってしまえば衰えて変

貌してしまう。そもそも心や性格だって、いろんな経験を積み重ねる内に変化していくものだ。だが血液は違う」

幸の表情が変わった。うっとりした、にくったらしいくらい綺麗な笑顔を浮かべて私の両手を取った。

「血液は、そう、血液型は不変だ……それこそ死が訪れるまで」

「……」

「だから僕は君に永遠の愛を誓える。血の契約って言葉もあるだろう？　それだよ」

ぶっちーん、ってキレた。

「馬鹿言ってんじゃないわよっ！」

何が血の契約だ。血液型は不変？　だから永遠の愛が誓える？

寝言は休み休み言え。

「私はアンタの餌じゃない。アンタの健康飲料でもサプリメントでもスッポンエキスでもからすみでもナイ、断じて無いんだから！！」

そのまま幸の家を飛び出した。

幸は実家暮らしで（吸血鬼一家は結束が固いらしい）本当は幸のお母さんに夕食お呼ばれしてたんだけど、今は幸の顔だって見たくない。あんな綺麗なツラ、見た瞬間引っかきたくなる。それで明日、

会社の女子に責められる。
アンタ福永課長（幸は総務課の課長なのだ）と付き合ってるんでしょ、アレまさかと思うけどアンタのせい？　だったら許せない、なーんて面倒なことになるに違いない。

ああああ、どうしてあんな男と付き合ってるんだ私。ただでさえ最近採血も重なって貧血気味だっていうのに。

「志乃ちゃーん」
「……たからちゃん」

駅へと向かって歩いていると、ちょうど仕事から帰宅したたからちゃんと鉢合わせた。

「あれっ、今日はウチで夕飯食べてくんだよね？　幸兄さんと仲直りできた？」
「……またケンカした」
「ありゃりゃ、それは大変」

たからちゃんと向き合ったまま、つい私はポツリと弱音を吐いてしまった。

「やっぱり幸は、私の事が好きなわけじゃないんだよ……」
「えー、そんな事ないよ」

あっさり否定するたからちゃんだけど、私はさらに弱気になる。

「そんな事、あるんだよ……幸の好きなのは私の血だもん。この間のデートだって焼肉屋へ連れてかれたし」
「焼肉嫌いだったの？」

「そうじゃないけど。だって『動物性タンパク質は体にいい。特にレバーは鉄分豊富で血中ヘモグロビンを増やすのに効果的なんだ』ってのたまうし。あからさま過ぎる」
「うーん、確かに幸兄さんにデリカシー欠けるところがあるのは否定できないけど、あれでも志乃ちゃんの事を考えているんだよ、きっと」
「私の事、と言うより、私の血液の事を考えてるんでしょアレは」
「まあまあ、とにかく中に入って。もう一度話し合ってみようよ。ね？」

気が付くとたからちゃんにつられて、再び幸の家へと戻ってきてしまったようだ。私は一瞬引き返そうとしたが、たからちゃんに腕を取られて強引に玄関の中へと入れられてしまう。

「あれ、馨（かおる）兄さんの靴もある。もう大学から帰ってきたんだ」

ぱたぱたと廊下を歩くたからちゃんの後ろ姿をながめながら、私は往生際悪く玄関先で上がるのをしぶっていた。するとリビングへ続く扉の前で立ち止まったたからちゃんが、何やら中の様子をうかがうようにして部屋をのぞいている。

『こっち来て』と無言で手まねきされた私は、ようやく重い腰を上げてそっと玄関を上がると、たからちゃんの元へと忍び足で歩いていった。

「なんか面白い事になってるみたいよ」

面白い事？　たからちゃんに促されて中をのぞくと、リビングのソファーに座って話をしている福永兄弟の姿があった。向かい合って座る二人の様子は、真剣そのものといった表情である。

――なに話してるんだろう？

はしたないと思いつつ、つい耳を澄ませてしまう。やがて聞こえてきた会話の内容が……

「……ランド？　兄貴が連れてくのか？」

「ただ心配なのは一度シーに行った話をされた時、あまり嬉しそうじゃなかった事だ。そもそも彼女は混んでる場所が嫌いみたいだ」

「なんなら小奇麗なレストランとか連れてってあげたら？　大抵の女はそういうの喜ぶぜ」

「でも、できるだけ肉をたっぷり食べさせないと。ただでさえ、献血してて貧血気味なんだ。これで俺が血をもらったりしたら、いつ倒れるか心配で……」

「しっかし毎回焼肉屋連れてくってのも、どうかと思うなぁ～もうちょっとお洒落な場所にしろよ」

「だからお洒落な焼肉屋を選んでいるんだ。しかも毎回同じ場所じゃ飽きると思って、俺がどんだけ都内の焼肉店まわって調査してるか、お前知らないだろ？」

「ハイハイ、それは惚れた弱みってやつですねー。大体いくら代々バンパイアの血が薄くなってきてるからって、兄貴は先祖返りみたいに血が濃いんだからランドとかシーとか一日中屋外ってキツいんじゃないの？　俺とたからなら平気だけどさ」

「次の日有給取って、一日休めば大丈夫だ。とにかく……」

そこで幸は初めて、たからちゃんと私の存在に気がついたようだ。馨さんの笑いを堪(こら)えたあの顔、あれは絶対途中から私たちに気づいていたって顔だ。

ふい、と顔をそむける幸……耳まで赤い。おいおい、そこでそう

いう態度は反則だってば！

――まったく、ホント嫌んなっちゃう……。

だから私はバンパイアの恋人をやめられないのだ。

（おわり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8430s/

バンパイアの恋人

2011年5月28日13時40分発行